

● 朝のこない 夜はない ●



さいしよ
最初が肝心です

まじ
まず一度だけ

かんじん
堪忍して下さい

山首 鈴木正修

堪忍の徳

二代目会長の村上先生は、昭和二十二

おります。

年二月三日、九十二歳でご遷化されました。

大変長生きをされ、亡くなられる直

前まで、堪忍のお話をされたそうです。

御法話集によると「私は短気だったから

堪忍の教えのありがたさがわかった」と

おっしゃっておられますが、たしかに、

気の長い人にとっては、堪忍ってなんだ

ろう？と なるのかもしれない。私自

身も、堪忍の大切さを身に染みて感じて

終生『堪忍』を説かれた村上先生

村上先生は代々お医者さんの家系で、

先生もお医者さんになられました。当初

は恵まれた人生を送られていたと思いま

すが、ある人の金銭の保証人を引き受け、

だまされて全財産をなくし、それだけで

なく奥さんにも子どもさんにも去られ、

自殺寸前のところまで追いつめられたそ

うです。そんな時に杉山先生に出会われ、三徳のお話を聞いて、この方と一緒に修行し、徳を積んでもう一度人生をやり直すうぐと決意されたのだそうです。そして、杉山先生の亡くなられた後、二代目の会長になりました。

聞くと、昔は本部で毎晩法座が開かれ、村上先生はいつも堪忍の話をされたそうです。その法座に出席されていた日達上人がこんなことを言っておられました。

「子ども心に、たまには違う話をしてほ

しいと思つたことがあつたが、大人になつて堪忍は本当に大事だということがわかる。堪忍は人間の土台を作るものだといふことが。しかしあの当時は、そうは思えなかつた。もつたないことを考えたものだ」

村上先生の『堪忍』の遺言

村上先生がご遷化されるまでの数日間を、御開山上人が小冊子にまとめておられます。

それによると、一月二十八日頃から何

となく体調が悪くなり、周囲の方が交代
でお世話をすることになったようです。

そして二十九日の朝、先生は、もう無上
道に帰るのだから枕を北枕にしてもらい
たい。多分、五日後の午後二時頃帰りま
す」と言われたそうです。言われる通り
北枕にし、同時に各方面に「先生ご病氣」
の通知を出されました。

その翌日の正午頃、私は無上道に帰る
のであるが、私の徳は皆ここに置いて行
くから、皆さん、堪忍強く、慈悲深く、
まごころ広く修行しなさい。お互いの力

次第で大きな徳の人となれます」と言っ
て、右手を握っては広げて見せられたそ
うです。（これは、腹を立ててはなら
ぬ」というお諭しです）

翌三十一日の夜十二時頃、御開山上人
を手招きして、今眠っている間に私は極
楽へ行つて来ました。実に綺麗な所で、
たくさんのおさまのおられるところであ
りました。仏さまは私を取りまいて『ご
苦勞様、ご苦勞様』と勞つて下さつて、
本当に嬉しかったです」と、さも嬉しそ
うな表情をされ、後はもう私の自由に

させて下さい。枕元には二人以上いなくてもいいよ」と言われたそうです。

そして二月一日に、みなさんに私の遺

言を伝えて下さい。妙法蓮華経は慈悲・

至誠・堪忍、因と果の五つである。悟つ

て実行し、三昧に入り、また実行しては、

三昧に入るよう」と言われ、見舞に来ら

れた人々に御開山上人が、そのお言葉の

意味を説明されたそうです。

その日の夜八時、御開山上人の手を両

手で包むように握り、それではどうぞお

願います。私の体はなくとも魂はここ

にいて、今迄よりも働きます。何もかも

お渡しするからよろしくお願いします。

と告げて後、合掌され、そのまま眠りに

つかれ、翌二日は一日中すやすやと眠つ

ておられました。

二月三日は大雪が降り、一面白銀の世

界となりました。村上先生はどうも胸の

あたりがお苦しい様子でした。その頃

からお顔の色が変わってゆくように見え

ました。一同が枕元に集まると、段々息

が長くなり、午後一時四十六分、「出る

息は入る息を待つことなく」遂に大往生

を遂げられた、ということですよ。

最後の最後まで先生は『堪忍』を説かれ、人々の身の上、会の行く末を案じておられたのです。

村上先生ご自身の修養法

村上先生御法話集（一）に次のようなお話が載っています。

『私が精神修養いたしますについてあります。私のかたがたかったことは、諸仏善神の擁護であります。私の心の曇った時には、すぐさま身体に異状を覚えるので、それが何よ

りありがたいことでありました。

俗に寒気という悪寒のする時や、ご飯が不味の時、大抵の場合は六波羅蜜の第一、布施の心遣いが足りない時でありました。物質を施さねばならぬ者に対して施しを怠った時、または他人の心を和らぐるような慰めの言葉を与えない時、我が身の幸いを喜ばなかった時、他人に法の道理を教えるに親切の心を欠いた時、またこれを惜しみたる時等には、すぐさま前に申したような身体に異状がありますので、その心持ちを改めて、曇りを取

ったのでありました。

第二の持戒（至誠）の心の欠けた時は、私の考えごとや成すべく準備をしたことがいずれも失敗に終わるのです。その時に反省いたしましたすと、私がこの娑婆世界に生を受けたる目的を忘れていた時が多かったのであります。他の人が高き位に上がり、幸いを得たるを快しとせぬ、いわゆる嫉妬心のある時、すなわち菩薩にあるまじき心遣いの時でありました。最も受け難い人身を得、しかも値い難い妙法に会い、生をこの娑婆世界に受けたの

は、他の模範となり、善人を造るべき大役があるのです。しかしながら妬みの心が起こるのは、その使命に反するものであります。今後はかかる心持ちを改めます、と誓いを立てますと、実に朗らかな気分となりました。

第三の堪忍が心に欠けている場合は、急に熱が出て顔がポカポカ温かいとか、私の申すことを他の人がよく聞き入れないようなことが起こつてまいります。またけがをするとか、器物を壊す等もあります。この時は大抵堪忍の足りない場合

であります』

『三徳』実践のお手本のようなお話です。

また村上先生は言っておられます。

『最初が肝心です。まず一度だけ堪忍し
て下さい。そうすれば、次の堪忍も自然
にできるようになります。こうして堪忍

を重ねてゆけば、その徳は実に、また、
非常に大きなものとなります』

むつかしい堪忍ですが、村上先生が言
われるように、一度できれば二度目から
はしやすくなるのではないかと思ひます。
人間は習慣の生き物ですから。

村上先生の堪忍の徳

杉山先生の時代、仏教感化救済会と言

つていましたが、その会の財産はすべて

杉山先生の個人名義でした。そのため、

杉山先生がご遷化された後、杉山家の代

表を名のる人が「杉山辰子名義の財産の

すべてを杉山家が相続する」と言つてき

ました。その時、会を思う人々が「法律

によつて会の安泰を圖つては」と進言さ

れましたが、村上先生は「冷たい法律に

よつて事態を処置したならば、私の三十

年に渡つて修養してきた堪忍の徳もたち

まち水泡すいほうに帰きしてしまふであらう。これは諸しよぶつ仏ぜんじん善神じんが私わたくしを試ためされているに違ちがいな「いと悟さとられ、相あいて手に寛かん容ような態たい度どを示しめし、会かいの人ひと々びとにもそのように話はなされて難なん局きよくを乗のり越こえられました。

この後あと、組そ織しきは法ほう人じん化かされ財ざい団だん法ほう人じん大だい乗じよう報ほう恩おん会かいとなりますが、村むら上かみ先せん生せいの堪かん忍にんのお徳とくが働はたらいたのだと思おもいます。認にん可かが下おりる前まえから各かく地ちの支し部ぶがどんどん増ふえ、

会かい員いん数すうは杉すぎ山やま先せん生せいご遷せん化げの頃ころの十じゆ倍ばいにもななつたそそううです。堪かん忍にんは本ほん当とうに大たい切せつです。なならぬ堪かん忍にんすするが堪かん忍にんです。

憂うきつつららき心こころにそわぬことことををみみな
善よきに悟さとりてよよろろここびびをを得えよ

(村むら上かみ先せん生せい御ぎ詠えい)